

海外教育機関との連携で行われた芸術学部生のための コミュニケーション教育に関する考察

大久保真道¹⁾・甲賀正彦²⁾・陶山 恵³⁾・橋野実子⁴⁾

¹⁾インタラクティブメディア学科・²⁾デザイン学科・³⁾アニメーション学科・⁴⁾基礎教育課程

A Case Study on Communication Education Programs for Art Students Collaborated with Foreign Educational Institutions

OKUBO Masamichi¹⁾, KOGA Masahiko²⁾, SUYAMA Kei³⁾, KITSUNO Jitsuko⁴⁾

¹⁾ Department of Interactive Media, ²⁾ Department of Design, ³⁾ Department of Animation, ⁴⁾ Division of Liberal Arts and Science

(Received October 30, 2015 ; Accepted December 17, 2015)

1. はじめに

大学での伝統的学びの形態に「交流」があり、人的にも物理的にも多くの交流がなされてきた。特に20世紀に入ると、物流、移動の高速化に伴い、交流は加速した。例として、ワルシャワ大学美術アカデミーの教員が企画運営するワルシャワポスタービエンナーレ（1966～）、メトロポリタナ・アスカボトサルコ自治大学デザイン学科の教員が企画運営するメキシコビエンナーレ（1990～）など、世界各地で応募作品の展示と、審査員のワークショップを中心とした文化交流が行われてきた。しかし、インターネットの時代、海外との人的交流は劇的に加速している。そのような背景において、東京工芸大学でも海外とつながる形態の学習実践が着実に増加している。

本学芸術学部では、2010年の日本ポルトガル修好150周年にあたり、日本の新しいメディア芸術を紹介する内容のイベントを開催してほしいという在ポルトガル日本大使館の要望に応え、ポルトガル国内の教育機関やメディアコンテンツ企業の協力を得て、beyond kawaii 展をポルトガル国内の3カ所と国内会場として本学で行った。この展示会では、大学と大学院の在大学生を中心に一部卒業生も加え、自作品の展示とプレゼンテーション、イラストとアニメーションのワークショップ、さらにはレクチャーを行った。その目的は、本学の教育成果をとおして、日本の新しいメディア芸術を世界に紹介すると同時に、学生達が、制作物を介したコミュニケーションを経験することであった。この一連の活動を、芸術系学部におけるコミュニケーション教育のモデルとして研究的な考察がなされ、その成果は、2011年に発行された「芸術世界」などで発表が行われた。研究から分かってきたこ

とは、「本学の教育的成果物が世界に通用する個性的なコンテンツとなり得ること、また、言語の違いを超え、制作物を介したコミュニケーション活動が展開可能であること」であった¹⁾。

その後も、「芸術系大学カリキュラムにおける制作物を介したコミュニケーション教育に関する研究」というテーマのもと、在外教育機関と協力しての短期教育プログラムの実践と、芸術系の他大学、特色あるコミュニケーション教育を実践している教育機関等の事例研究を行ってきた。本研究では、2011年度以降の東京工芸大学芸術学部がポルトガル、メキシコ、オーストラリアで行った実践をそれぞれ紹介し、その教育的意義と効果について検討し、今後の展開と可能性を論じる。

2. 制作物を介したコミュニケーションの教育

芸術学部の有志教員が、2006年度より「芸術系大学カリキュラムにおける制作物を介したコミュニケーション教育」に関する共同研究を始め、特にメディアコンテンツ産業がよりグローバル化する今日に対応したコミュニケーション教育カリキュラムの構築を念頭に、近年は海外の大学などの教育研究機関と協力しての短期のプログラムを実践してきた。

東京工芸大学芸術学部のカリキュラムにおいては、基礎教育課程で開講される「プレゼンテーション基礎演習A」と「プレゼンテーション基礎演習B」のような、プレゼンテーションの基礎理論を理解し、他者に伝えたいことを効果的に、わかりやすく伝えることを学ぶ授業や、日本語表現、そして、各種外国語科目など語学学習を通して基礎的コミュニケーションを身につける授業がある。

一方、メディアコンテンツ制作を学ぶ芸術学部の学生が、社会に出て求められる、より実践的な作品を介して

のコミュニケーションスキルは、専門課程の各種演習内での、発表と講評などの場で育成されている。ただ、そのような演習内で行われる作品を介してのコミュニケーションは、学生と教員という大学組織内でのコミュニケーションに留まる場合が多く、外部にいる他者に、作品と作品に関するやり取りを通して自己のメッセージを伝え、そのコミュニケーションを通して自己の成長と作品の質的向上を図る訓練には、十分とは言えない。より実践的な学びには、外部団体と協力してのイベント運営プロジェクトや、外部コンペティション参加を前提とした作品制作などが行われている。そして、本研究に関するプログラムとしては、国外の研究教育機関と連携してのコンテンツ発信型の短期研修プログラムが、ポルトガル、メキシコ、オーストラリアにて行われた。

大学教育の現場を取り巻く環境に目を向けてみると、中央教育審議会の2008年12月のまとめ「学士過程教育の構築に向けて」で提案された学士力のなかの汎用的能力としてのコミュニケーションスキルや、2011年1月の答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育のあり方について」で示された基礎的・汎用的能力のなかの人間関係形成・社会形成能力などの育成とその成果が求められているように、コミュニケーション教育カリキュラムの向上が求められている。

そのような中、近年、アクティブラーニングの手法として、大学教育においても評価を受けているワークショップ型の学びのスタイルがある。中野民夫氏はその著書の中で、ワークショップの特徴を、「講義など一方的な知識伝達のスタイルではなく、参加者が自ら参加・体験して共同で何かを学びあったり作り出したりする学びと創造のスタイル」としているが、本研究で取り上げる研修プログラムも、その要素を持ち合わせている²⁾。ワークショップ型の学びの場において学習者は、より主体的な参加と行動が求められ、それを行うことにより得られるものは、知識や技術の習得に留まらず、社会認識の深化、学習者本人の学習姿勢の変容や、さらに、芸術系学部生としては、作品制作姿勢の変化までもが見られることがある。

また、本研究で検証するプログラムに共通する要素は、異文化コミュニケーションである。そのような性格の研修でそれぞれの学生は、自分の所属する組織、社会、文化とは異なるところにいる相手を念頭に、作品制作と発表、あるいは、自己の作品の紹介を行うことを目的として活動を行う。その過程においては、相手を意識し、相手の反応を予測してのメッセージ発信という、人間のコミュニケーションの根源的な行為を行う³⁾。

そして、芸術系学部の教育、とくに東京工芸大学芸術

学部のような、メディアコンテンツ制作の教育において、重要な要素である、「いかに自分の作品がその受け手に受け取られ、どのような評価を受けるか」ということを意識しての作品制作であり、また、その反応と評価を知った上で、次の作品制作に向かい続ける姿勢である。このメディアコンテンツ制作の基本姿勢が特に訓練されるのが、ここで紹介するような研修プログラムである。

3. ポルトガル

ポルトガル各地での活動は、在ポルトガル日本国大使館の支援を受け2010年の「日ポ修好150周年記念事業」への参画を目指してその前年から展開した。「beyond kawaii project」と題したその活動の詳細と考察については『『芸術世界』東京工芸大学芸術学部紀要17、2011年』で発表したとおりである。その後、リスボン市クリエイティブ大学とコインブラ市コインブラ大学との教育研究交流が続き、現在に至っている。

3-1. JP_PT Project JAM SESSION 1st

2010年の日ポ修好150周年記念事業でリスボン市における beyond kawaii 展の開催会場となったクリエイティブ大学との教育研究交流は、「JP_PT Project」と題した制作物を介した異文化コミュニケーション教育へと発展し、まず2011年10月クリエイティブ大学にてワークショップを二本開催、シルクスクリーン作品の共同制作を開始した。

3-1-a 水墨画ワークショップ

2011年10月25日 クリエイティブ大学にてデザイン学科谷口広樹教授が日本画の歴史を講義したのち、和紙・筆・墨汁という東洋的な画材を提供して作品制作を行った。

3-1-b 漢字でアニメーション (KANJIMATION)

2011年10月25日クリエイティブ大学にて、アニメーション学科和田敏克非常勤講師を中心に、アニメーション制





作のワークショップを行った。参加者の名前を漢字表記に置き換え、カットアウトでパーツを制作、参加者各自が「自分を表現する小物」を持参し、漢字のパーツと小物と共にガラス板を利用しながら本人のバストショットをフレームバイフレームで撮影していくというコマ撮りの手法により、連作のアニメーションを制作した。

3-1-c シルクスクリーン共同制作

クリエイティブ大学の学生と本学デザイン学科の学生が共同制作のチームとなり、日本とポルトガル、互いの国のイメージをテーマとして、同一のサイズと色数でイラストレーションを制作。日本からはデータを送り、クリエイティブ大学のシルクスクリーン工房で印刷を行って完成させた。



3-2. JP_PT Project JAM SESSION 2nd

東日本大震災から1年経ち、日ポの両国で「beyond kawaii 2012 : Reborn Japan」を開催した。

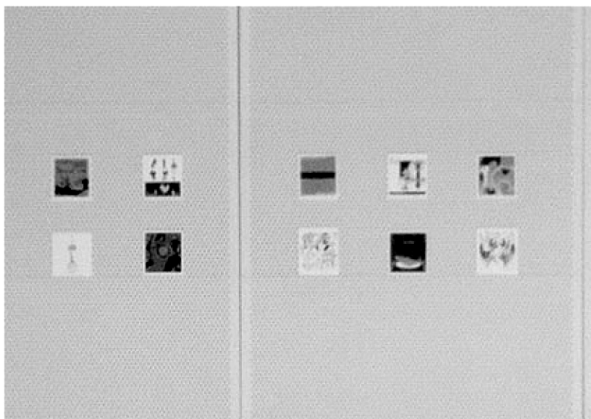
3-2-a リスボン市フォス宮での展示

2012年3月11日、在ポルトガル日本大使館主催行事として、共同制作したシルクスクリーン作品の展示および、クリエイティブ大学からこのイベントのために制作された日本をモチーフにした立体作品の展示、KANJIMATION の上映を行った。



3-2-b 本学での展示

2012年3月8～21日、東京工芸大学3号館ギャラリーにて、beyond kawaii 2012 : Reborn Japan 展を開催。共同制作したシルクスクリーン作品の展示と、



KANJIMATION の上映、これまでの活動の記録映像の紹介を行った。

3-3. JP_PT Project JAM SESSION 3rd

日本とポルトガル両国で同一テーマの作品を制作し、双方の作品を合体させることを完成目標として活動した。

3-3-a イラストレーションワークショップ「紙しばい制作」

2012年8月22～23日、クリエイティブ大学の学生が三人一組の複数チームに分かれ、日本の昔話「ねずみの嫁入り」の物語をもとに紙しばいを制作した。「紙しばい」は日本独自の文化であるため、紙しばいの舞台を提供し、その成り立ちの説明と実演、物語をどのような場面構成で考えていくかなどの解説を谷口広樹教授が行い、ワークショップを指導した。

3-3-b アニメーションワークショップ「Going to Japan in Animation」

2012年8月22～23日、クリエイティブ大学の学生が、「日本を訪ねる」をテーマにストップモーションアニメーションを制作した。アニメーション学科古川タク客員教授と和田敏克非常勤講師が指導し、複数チームで制作した作品を最終的に一本の映像にまとめて完成させた。

完成した紙しばいとアニメーション作品は、同年10月23日にクリエイティブ大学ギャラリーパレスにて開催されたフェスティバルで公開した。

3-3-c アニメーションワークショップ「Going to Portugal in Animation」

2013年3月17日、東京工芸大学アニメーション学科学生および院生が、「ポルトガルを訪ねる」をテーマにストップモーションアニメーションを制作した。アニメーション学科古川タク客員教授と和田敏克非常勤講師が指導し、複数チームで制作した作品を最終的に一本の映像にまとめて完成させた。

3-4-b イラストレーションワークショップ「紙芝居制作」

2013年3月20～21日、東京工芸大学デザイン学科の学生が、谷口広樹教授の指導により、ポルトガルの民話「バルセロスの鶏」の物語を元に紙しばいを制作した。

3-5 イラストレーションワークショップ「現代版南蛮屏風制作」

2013年6月27日～7月12日、東京工芸大学とクリエイティブ大学の学生が、それぞれの国をイメージしたイラストレーションを描き、データを組み合わせて一幅の屏



風の体裁に仕上げて完成させた。

3-6 イベント「南蛮470」への参加

2013年10月21日～27日、コインブラ市コインブラ大学で開催されたイベント「南蛮470」は、1543年にポルトガルから日本に鉄砲が伝来した両国の出会いから470年経ったことを記念して企画されたものである。両国間の文化交流が講演会、座談会、ワークショップなど様々な側面から行われた中で、10月24日のプログラムとして、学生のアニメーション作品上映とアニメーション南蛮屏風の記録の紹介、日本のアニメーションについての講演を筆者陶山がビデオ提供という形で参加した。

3-7 2013年度芸術学部大学公開事業 特別展示企画

2014年3月30日～4月20日、東京工芸大学1号館1階ギャラリーにて、JP_PT Project JAM SESSION 3rdで制作した両大学二本ずつのワークショップ作品を合体させ、両国の昔話の紙しばいの展示、互いの国を訪ね合うという内容のアニメーション作品の上映を行って成果の発表とした。

3-8 ポルトガルにおける活動のまとめ

異なる文化圏に属しながら、芸術という同じ学術的テー



マに向かう学生・院生が、物理的距離を乗り越えて互いに刺激を交わして共同作業を行うためには、どのような手法が有用であるか。この問いのもとに現在もポルトガルでの活動を展開している。この活動は、特にクリエイティブ大学とコインブラ大学において深化発展した。現地で同時に創作活動を行う場合も、データの交換によって作業を進める場合も、最終的に一つの作品としてまとめることが共通したテーマである。学生・院生にとって、様々な異文化体験を通して自らの制作物が発揮する力を再確認することができたことの意味は大きい。制作物を介したコミュニケーション体験は、参加した学生・院生にとって国際感覚を身につける貴重な機会となった。そして、自身の表現活動の可能性に気づき、そこから更にその先を目指す好機ともなった。この教育的効果は、このような研修プログラムならではの成果であるといえるであろう。また、教員の研究交流は互いの関係性が強まるにつれ知的探求心を強く刺激しあうものとなり、国際的な視点に立って活動する可能性が拓かれた。継続的な展開によって、活動のアイディアも組織としてのまとまりも、確実に改善されている。現在も、芸術、理工学、情報科学等、複数の側面から人的、研究的な交流を提案されており、この機会を今後活かして更なる展開を目指していきたいと考えている。

4. メキシコ

2014年メキシコポスタービエンナーレが開催され、関連企画としてデザイン系の大学生を対象としたグラフィックデザインのワークショップが実施された。会場はミチョアカン州モレリア市、ミチョアカン州立大学の校舎であった。甲賀はポスタービエンナーレのチェアマン、ハビエル・バルムードス氏より、講師として招聘され、4日間のグラフィックデザインのワークショップを行った。

このワークショップを研究室の授業と連動させ、芸術学部の国際交流のかたちの一つとして成立を試みた。

日本の学生は9名、東京工芸大学芸術学部デザイン学科イラストレーション甲賀研究室の3年生と4年生、メキシコの学生は10名、甲賀のワークショップを選んだメキシコの学生であり、所属大学または出身校は、国立メキシコ自治大学 (Universidad Nacional Autónoma de México)、メトロポリタナ・アスカポトサルコ自治大学 (Universidad Autónoma Metropolitana México)、ミチョアカン州立モレリア大学サンニコラ・デ・イダルゴ (Universidad Michoacana de San Nicolás de Hidalgo)、ラ・サジェ・モレリア大学 (Universidad La Salle Morelia) であった。約半数はグラフィックデザイン、イラストレーションを専攻している学生であり、半数はグラフィック

表現に興味を持つ建築の学生であった。

表現のテーマは「世界遺産」とした。ワークショップ会場であるモレリア市には、世界遺産に指定された「モレリア歴史地区」があり、街の中心部分のほぼ全てが指定を受けている。ミチョアカン州の学生にとって身近なものであり、情勢が不安定なミチョアカン州におけるアピールすべき重要な観光資源であり、恩恵と格差を生む複雑な問題も存在している。日本でも世界遺産は注目を集めているテーマであり、世界遺産を通して強調点や視点など、日本とメキシコの違いを比較しながら見るのできるテーマである。

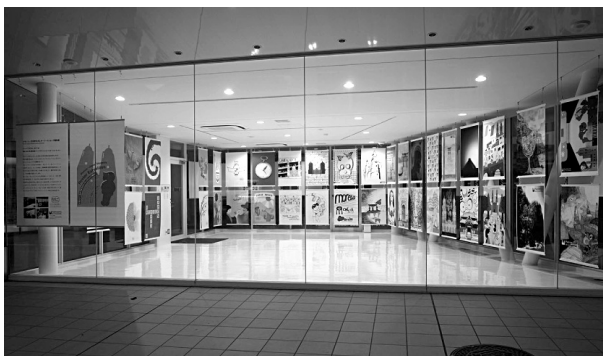
表現のフォーマットはA4タテ。B1サイズのポスターになることを想定し、制作する。制作終了後、お互いの学生作品を鑑賞、意見交換を行った。日本の学生作品は5月に制作終了し、実物を甲賀が持参し、メキシコでのワークショップ最終日にワークショップ会場に掲示した。メキシコの学生は日本の学生作品との共通点や差異などを楽しみ、それぞれの作品にコメントした。参加学生が制作したA4の画面をB1サイズに拡大、印刷し、東京工芸大学のギャラリーで展示し、メキシコ学生の作品に日本の学生がコメントし、その情報をメールによるかたちで意見交換し、終了するものである。メキシコの学生にとって、作品を東京の学生にアピールできることは大きな励みとなると考えた。学生のポスターは2015年7月22日から8月7日まで東京工芸大学中野校舎のギャラリーで、2号館メディアラウンジと、1号館インフォメーションコーナーで展示し、展示の模様を撮影したものを受講学生全員に送付した。

また、この企画に興味を持った、メトロポリタナ・アスカポトサルコ自治大学 (Universidad Autónoma Metropolitana México) デザイン学科は、日本とメキシコの交流をテーマにポスター制作し、33名の学生と教員の作品を同時展示した。展示では主に1号館に「日本とメキシコの交流」ポスターを展示し、2号館で「世界遺産」ポスターを展示した。約60枚の展示会となり、日本とメキシコの作品交流の展示が華やかなものになった。

ワークショップの内容

日本とメキシコの学生がほぼ同時期に、同じテーマ(世界遺産)、同じフォーマット(ケント紙A4タテ、24色セットのマーカーの支給、その他画材の使用は自由)、同じ制作環境(1日3時間の授業を4日間に分けて実施)で作品制作し、問題意識や表現の独自性など、違いが明確に表出することを意図した。

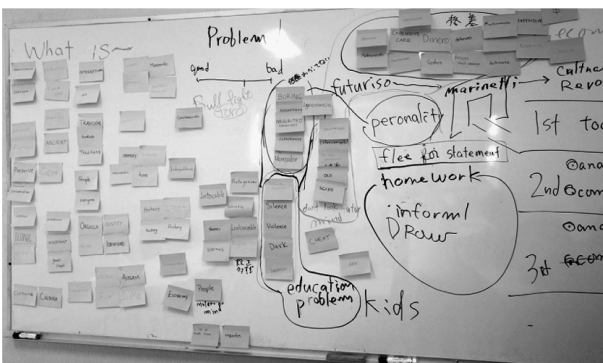
1日目



(写真1) 2号館展示会場



(写真2) 1号館展示会場



(写真3) 付箋によるディスカッション

世界遺産についてのディスカッションを行った。
 「世界遺産とは何か」「世界遺産の問題は何か」「何をアピールすべきか」など項目別にキーワードを付箋に書き、分類分けをし、それぞれの主張をまとめ、問題点の集約を図った。意見を述べあい、表現対象への意識を高めた。

2日目

前日のディスカッションから、何を表現すべきか、サムネールスケッチも同時進行で作業を進めた。ここでは



(写真4) 受講生 ERICK のサムネールスケッチ



(写真5) 集合写真

学生同士のディスカッションではなく、表現上のコツを伝授することを目的に、1対1の対話形式で授業運営を行った。

3日目

制作途中の作品を壁に貼り、作者のプレゼンテーション

全員での批評を行った。どこが優れているのか？ この問題があるのか？ 改善のポイントは？ など、他者の作品の批評を通してデザイン表現の学習を行う。

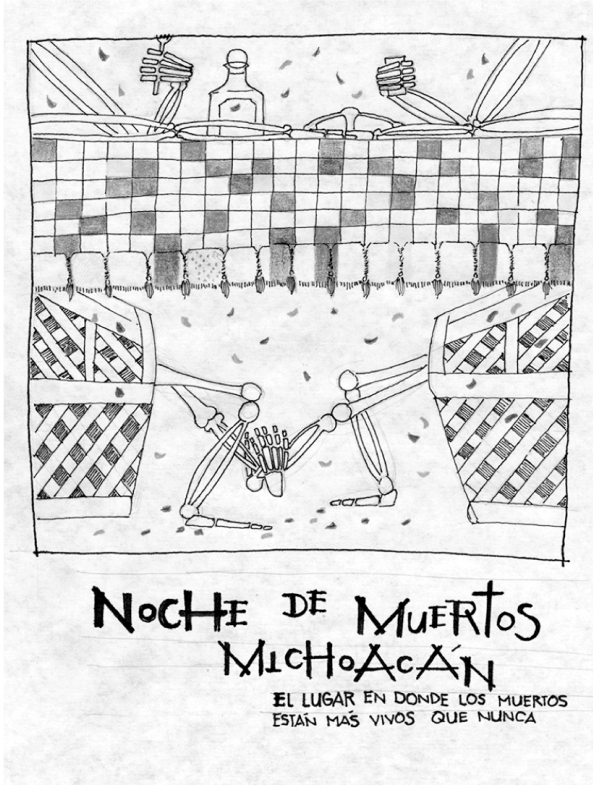
4日目

作品を完成させ、何を理解したか、制作する意味は何かの話し合いを行った。この授業にどのような意味があったか、意見交換を行った。

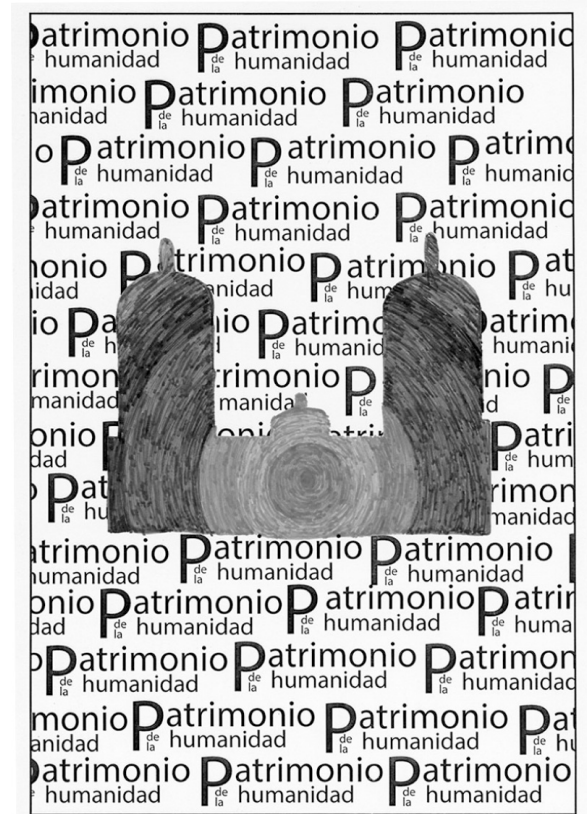
ワークショップ学生作品解説

メキシコ1 死者の夜

ミチョアカン州の伝統的な祭りである「死者の祭り」をテーマに描いたものである。作者 Dario はテーブルクロス、椅子、など祭りのディティールを理解している。日本の学生には表現できない深さと地域性を表現した。日本の学生は、同じ画材を使いながら、これほどの違い



(作品1)



(作品3)

が出ることに感心していた。

メキシコ2 モレリア・カテドラルの再開発

作者 Erick は建築を専攻している学生であり、世界遺産の保存が重視され、新しい建築が作れないジレンマを持っていた。カテドラルの美しさを傷つせず、新しい建築のあり方をグラフィックで提案したものである。日本の学生は、世界遺産の中で生きる学生の不自由さと優しさを理解していた。



(写真6) 作者 Eli と甲賀



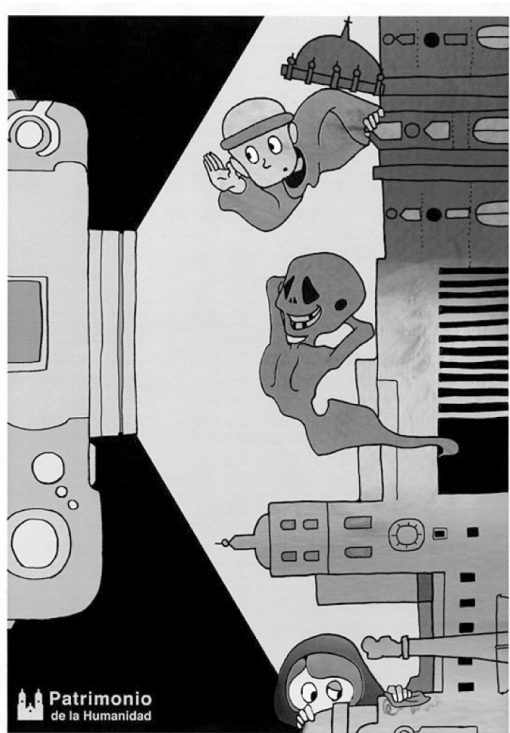
(作品2)

メキシコ3 カテドラルと民族の色

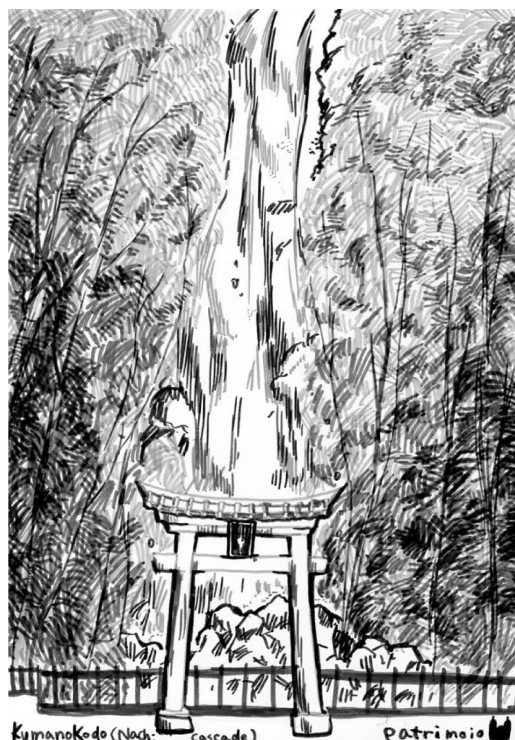
ミチョアカン州の民族衣装の美しさをカテドラルへのプロジェクション・マッピングとして表現したものである。作者の Eli はメキシコの色彩の独自性をアピールすることをテーマにしている。日本の学生は、その色彩に魅力を感じていた。

日本1 モレリア歴史地区

モレリアの観光ポスターを制作したものである。作者 Mami はモレリアを調べ、その魅力を1枚の画面に収め



(作品4)



(作品5)

ることをテーマにした。メキシコの学生は、カテドラルや修道院、映画祭などモレリアのことをよく調べていることに驚いた。自分たちは日本を意識して制作しなかったからでもある。

日本2 熊野古道

支給されたペンのみで表現することを意識して、線による表現が生きるモチーフとして那智滝を描いた。作者 Sakurako はキャンパスに絵の具による厚塗り技法を得意とするが、与えられた画材に新鮮な発見があり、この表現となった。メキシコの学生は、滝のモチーフと明るい色彩に日本の独自性を見た、と感想を述べた。彼らも、同じ画材を使って、仕上がりに大きな差が出ることを楽しんだ。

日本3 モレリア歴史地区

作者 Chisa は作品を鑑賞するモレリアの学生を意識して制作した。情勢不安なモレリアではなく、明るく、楽しいポスターを目指した。メキシコの学生は、モレリアを奇異な目ではなく、やさしい眼差しで描いたことに感動して、多くの学生がこの作品に言及していた。

ワークショップに参加した学生は、お互いの作品に新鮮な驚きを持って鑑賞し、直接に対面するコミュニケー



(作品6)

ションではない、ヴィジュアルを通しての交流であったが、深い相互理解を体験した。イラストレーション表現は国境や言語を越えて、素早く、深い理解をもたらす、優れたコミュニケーション・ツールであることを再確認

した。

5. オーストラリアでの短期研修プログラム

2015年3月にオーストラリアにおいて、英語学習と専門分野の学習を併せた形の短期研修が試験的に実施された。これは従来から行われているカーネギーメロン大学（アメリカ・ピッツバーグ）との交換留学制度とは違った目的と形式を持った海外研修プログラムである。

5-1 背景と新たな試み

東京工芸大学の海外留学/研修制度としては、カーネギーメロン大学との間に、3・4年時の芸術学部生を対象とした4か月間の交換留学制度（単位認定可）がある。学内選抜を経て、合格者はカーネギーメロン大学の芸術学部で授業を受講し、帰国後単位認定を行うものである。専門分野を交換留学の形で学ぶことができる制度のため興味を持つ学生は多いものの、参加するためにはTOEFL 600点（PB）の高い英語力が必要とされる。これは英語を専門に学習している一般大学生でも難しいレベルで、この条件を満たせずに交換留学制度への参加をあきらめる学生が多いのが現状である。そのため、新しい国際交流のあり方として、英語の試験を参加条件とせず、現地の文化や芸術に触れつつ英語の学習も行う短期研修プログラムが企画され、学内研究助成を受けて2015年3月に実施された。

メディア芸術の創造と発信に向かう本学芸術学部の教育内容と成果物は国際的な競争力を持ち得るものであり、社会に出た卒業生・修了生の活躍の場も国内外に拡大している。その背景の中で、本プログラムは一般的な語学研修にとどまらず、学生の専門分野の学習にも寄与する内容として計画され、学生の向学心を支援し、将来性を開拓することを目的としている。

5-2 研修内容

研修先としては、芸術関係の学科があり英語研修もできるという条件を満たすオーストラリア・クイーンズランド州の南クイーンズランド大学を選定した。学生の参加しやすい春休み期間で、研修先の新学期も始まっている3月の7日間、6名の学生の参加のもと、研修を実施した。参加対象は全学年だが実際の参加者は1年生と2年生で、その所属学科は5学科にわたった。参加者の英語力の測定は行っていないが、初級から上級までの幅広いレベルだと推測される。

主な研修内容は、参加学生による作品プレゼンテーション、英語レッスン、陶芸ワークショップ、先住民アートワークショップ、美術館訪問である。中でもこの研修を特徴づけるのは学生の作品プレゼンテーションで、参加者が自身の作品もしくは研究を英語で発表した後に、現

地の芸術系学生やアーティストと交流を行った。作品プレゼンテーションは2回あり、一度目は大学のあるトゥーンバ市内の民間アートセンターで一般市民の方々を対象に行い、二度目は大学内で芸術系学生および芸術学部のスタッフの参加で行われた。どちらのプレゼンテーションも会場には多数の参加があり、終了後の交流会では互いに紹介をしあい、意見を活発に交換する様子が見られた。アートセンターでのプレゼンテーションの参加者は小学生からベテランアーティストまで年齢も職業も様々で、また学内では大学関係者と大学生ということで、参加学生にとってはプレゼンテーションを通して多様な人々に対して発信をして互いに交流する経験となった。日本語での作品発表は多くの学生が既に経験していたことだが、今回の英語での発表は英語表現の問題だけではなく、新しい観点を獲得することができたと言える。日本語で日本文化を持つ相手にプレゼンテーションをする時とは違い、オーストラリア人という受け手の文化的状況や背景知識を考慮して全体を構成する必要がある、その時点で参加学生は自らの作品を違った目でながめることになった。さらに発表後の交流会では予想外の質問やコメントを受けることも多くあり、それらを通して作品をもう一度見直すことができた。

英語レッスンについては他の企画が多かったこともあり十分な時間は取れなかったが、ゲームや動きを伴うアクティビティを通して、英語の使い方を体で覚える内容となっていた。また、学生たちは全員現地の家庭にホームステイをしたため、家庭で生活する体験の中で英語を使うチャンスを多く持つことができた。

5-3 研修準備

この研修の重要な部分である作品プレゼンテーションのため、参加が決まった段階から、担当教員の指導のもと、約3か月をかけて以下のように準備を行った。

- ・12月 持参する作品（研究）の選定＜学科担当教員＞
 - ・1月～2月 英語原稿の作成＜英語教員＞
 - ・2月～3月 スライド作成＜学科担当教員、英語教員＞
 - ・3月 出発前リハーサル＜学科担当教員、英語教員＞
- 発表内容は、授業の課題などで制作した作品を発表した学生が4名、研究発表が2名で、写真作品、映像作品、デザイン作品、アニメーション作品、日本文化・デザイン研究、と多岐にわたっている。

5-4 事後指導

研修終了後、学習内容を振り返り定着させるためにミーティングと成果発表を行った。

まずは帰国後3週間経過した時点で参加者を集めて反省会と意識調査を実施して、研修の意味づけと今後の活



英語研修授業の様子



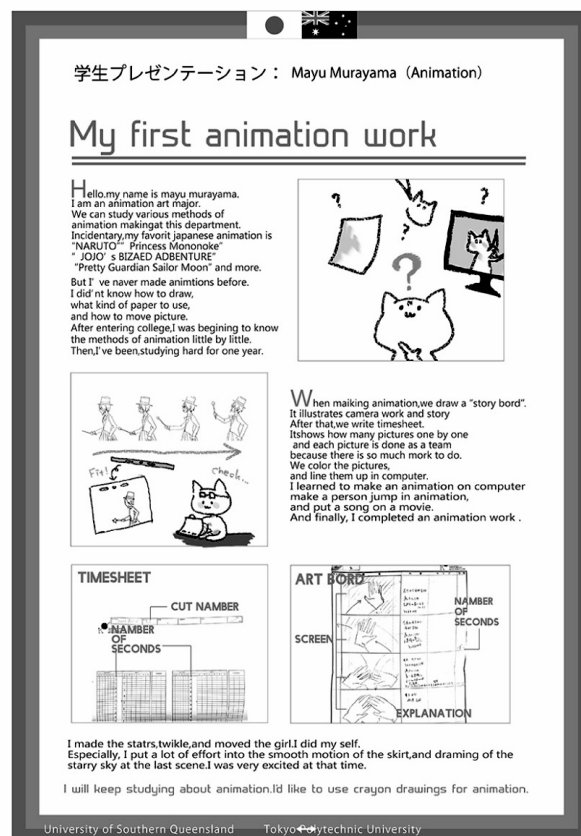
プレゼンテーションの様子

動への動機づけを行った。その後、7月の「芸術学部フェスタ」への共同参加の準備を行い、フェスタでは研修成果を記したポスター展示を行った。

5-5 学生の意識変化

研修の成果を図る一つ的手段として、帰国後ミーティングの際に意識調査を実施した。その結果、全体的に研修への評価が高かったが、特に学習意欲の向上、リスニング力の向上、英語とオーストラリアへの興味の高まり、積極的な態度（英語に抵抗がなくなる、間違いを恐れない）の点で特に効果を感じている参加者が多いことが分かった。5点法での調査で、4点以上の項目は以下の通りである。

英語への関心が高まった（4.8）、英語を学習する意欲が向上した（4.6）、英語への抵抗がなくなった（4.3）、オーストラリアに対する関心が高まった（4.3）、英語を聞く力が向上した（4.1）、英語の間違いを恐れなくなった（4.0）



学生の作ったポスター

5-6 研修の成果と今後の展開

前述の通り、参加学生は全般的に研修に対して高い評価をしていることがわかったが、教員側から見た成果には次のようなものがある。

専門分野のプレゼンテーションをすることで、学習のまとめと発展を促し、また英語で発表ができるという自信を持たせることができた。それは、専門分野と英語の教員が協力しあうことで達成されたものである。

参加者の英語学習に対する意欲の高まりも顕著で、参加者の半数は次年度の「上級英語」を履修して学習を続けている。参加者の内1名は、カーネギーメロン大学への留学も考えており、短期研修参加後に交換留学という道筋も今後の研修のあり方として考えられる。帰国後の学習意欲に効果が出た学生もあり、授業参加状況が改善された例が見られた。

以上のように、今回の短期海外研修の効果が一定以上確認され、学生からの需要も大きいことから、今後も同様の研修を継続していくことが望ましいと言えよう。また、将来的に単位取得が可能になれば、海外研修の内容を大学の学修として位置づけることができる。学生へのサポート体制、引率教員の確保などの課題はあるが、IT

化・国際化の時代において、学生の学びの場を世界へ拡大し、学生の視野を広げるプログラムとして開発が可能であろう。

6. まとめ：考察と今後の展開

この節では、三つの異なる地域にある研究教育機関との連携で行われた芸術学部生のための短期教育プログラムを検証したことによって見えてきたことについて、今日の大学教育に関して行われている研究と議論をふまえながら考察を行いたい。

まず、学生にアクティブラーニングをうながす教育活動という観点から今回とりあげた事例をみると、ワークショップと銘打って実施されたプログラムに限らず、作品展示や英語プレゼンテーションにいたるまで、学生の取り組み姿勢の中に主体性の強まりを見て取ることができる。

異文化コミュニケーションは、自分とは異なるところに住む相手を前にして直接的話すことはもちろんのこと、ポルトガルの大学との間で行われたアニメーション作品やイラストレーション作品を介したメッセージ交換や、メキシコの大学との間で行われたヴィジュアルを通しての交流など、直接的な接触を伴わない学習プログラムにおいても、参加学生はそれぞれ深く相手を知ることになっている。これは他者のことを考え、相手の反応を予想してのコミュニケーション行動を、彼らが日常的に参加する大学授業内では通常体験できないような深さまで求められたからだと考えられる。このような非日常的な体験は、学生のコミュニケーション能力の育成に大きく貢献していた。

このような非日常的な体験をとおしてのコミュニケーション教育から得られるものは、メディアコンテンツ系産業界で特に必要となる、見たことのない、会ったことのない相手、オーディエンスや鑑賞者、さらには制作過

程で直接的に承認を得なければいけないプロデューサーやその背後にいるスポンサーなど、仕事としてのメディアコンテンツ制作では、どうしても避けて通ることのできないコミュニケーションを成立させる能力の向上であると考えられる。今日の社会において、異文化コミュニケーションに求められるような、自分とは大きく異なったバックグラウンドや価値観を持つ他者とコミュニケーションを成立させる能力が、ますます求められるようになってきている。

コミュニケーション教育がますます重要になる今日の大学教育において、特にメディアコンテンツ制作を念頭に行われる芸術学部の教育の中で、本研究でとりあげたような国外の研究教育機関と連携してのコンテンツ発信型の短期研修プログラムの継続的な実施と、さらには、その活動の単位化など正規のカリキュラムへの取り入れも検討する価値が大きい。そのためには、その活動の成果を定性的、また、さらには定量的に評価する研究の継続が必要である。

「越境の説明」という概念で、田島充士らが先行実践と研究を行っており、そのような研究事例のリサーチを行い、本学での実践と検証を進めることで、このようなコミュニケーション教育のさらなる理論化もできると考える⁴⁾。

註

- 1) 陶山恵、大久保真道、谷口広樹、橋本裕充「日ボ修好150周年記念事業『beyond kawaii展』開催におけるコミュニケーション教育の一考察」(『芸術世界』東京工芸大学芸術学部紀要17、2011年)、10頁。
- 2) 中野民夫『ワークショップ 新しい学びと創造の場』(岩波書店、2001年) 11頁。
- 3) 船津衛『コミュニケーション・入門：心の中からインターネットまで』(有斐閣、2010年)
- 4) 富田英司・田島充士編著『大学教育 越境の説明をはぐくむ心理学』(ナカニシヤ出版、2014年)